

制作なかばに

宮崎準之助

いま台車2つは作った。それぞれの作りに工夫をしたが概して新味は感じられない。足踏みだけでいっこうに進みませんと、友人らがつぶやくことは必至と思われる。ならば車に載つけるものに一苦勞あっていくらかの充足を得たいと焦る。だがO君のいう惰眠を破るほどの投げ石は積みそうもない。載つけものとはいつでも決して付け足しの部分ではなく、瀝とした自治領でなくてはならないと考えている。さてと。

車挽きは止めましたと、私は一度方向を転じたはずであった。そして薄ぼんやりとではあっても、木偶から彫像への道筋が見えかけていたのである。もっとも小品ばかりの習作で終わっているのだが、ここ4、5年の過渡の足跡はいづれ辿り直したいと思っている。それは見損ねた美神への未練なのではない。むしろそこには、あぶら汗を搾りとられるとか何か苦痛の気味がある。いまさら寄って行かねばならない参詣の地ではない。少なくとも前へ前へと驀進するのが宿命の現代美術はそう教えている。それでもなお偏向した関心なのか、私の内部に、彫像つまり人の姿かたちを軸とした造像の界域を思うものがある。どこが本線やら支線やら錯綜限りない美術の賑わいのなかなのだが、なにやら転轍器の一つが、そこらに匿されているように思われるのだ。

ともあれ私は錆びた引込線で休んでいるようなものか。今回は明らかに後退地点からのものだ。張りなくつやなくしょんぼりと見えないか。でもいいではないか。ままよ、低迷も退歩も錯誤もあつての人生さとぼやいて、カラリンコンと天ぷら揚げる心境でこの場所を過ぎよう。この不真面目の故に罰の当らば当れ。何をしようとしまいと見える人には見えてしまうのだ。そう得心して、考え込んだり嘆いたりはずまい。

(1986.11.24)